

# 17世紀初期のアブナキ族

澤 田 俊 明

## はじめに

ニューイングランド南部におけるインディアンとイギリスの植民者との関係についての研究と比較して、ニューイングランド北部におけるインディアンとヨーロッパの植民者との関係についての研究は少なかったが、最近、アメリカにおいて研究の成果がいくつか発表され、その実態が明らかにされてきている。<sup>1</sup> このニューイングランド北部に居住するインディアンがアブナキ族で、彼らは今なお自らの先住民としての固有の権利を奪回するための闘争をヴァーモントにおいて展開している。<sup>2</sup>

記録の上で、ニューイングランド北部を最初に訪れたヨーロッパ人は、フィレンツェ出身のジョヴァンニ・ダ・ヴェラツァーノである。ヴェラツァーノは、1524年にメインの沿岸を航海し、アブナキ族についての記事も残している。しかしながらフランス及びイギリスが本格的にこの地域への進出を企てるのは、17世紀に入ってからのことである。17世紀に入ると、アブナキ族とヨーロッパ人の接触も頻繁に行われ、そ

1. 例えば、Colin G.Calloway, *Dawnland Encounters: Indians and Europeans in Northern New England* (Hanover: University Press of New England, 1991); Calloway, *The Western Abenakis of Vermont, 1600-1800: War, Migration, and the Survival of an Indian People* (Norman: University of Oklahoma Press, 1990); Kenneth M. Morrison, *The Embattled Northeast: The Elusive Ideal of Alliance in Abenaki-Euramerican Relations* (Berkeley: University of California Press, 1984); Bruce J. Bourque and Ruth Holmes Whitehead, "Tarrantines and the Introduction of European Trade Goods in the Gulf of Maine," *Ethnohistory* 32 (1985), 327-41.

の結果インディアン社会は多大な影響を被ることになる。

本稿においては、まず17世紀初期の伝染病が大流行する以前のアブナキ族の社会及び生活を明らかにしていきたい。次にアブナキ族は、フランス人及びイギリス人の侵入に対して如何なる対応をしていったのかを考察していきたい。

## I

アブナキ (Abenaki) とは、「夜明けの地の住民」(dawnland people) または「東方の住民」(Eastners) を意味すると考えられている。<sup>3</sup> アブナキ族のテリトリーは、メインの大西洋岸から西方はシャンプラン湖に至るまでの地域をカバーしていた。アブナキ族は東アブナキと西アブナキとに分けられる。この分類は、政治上の

2. 1992年6月12日、ヴァーモント州の最高裁は、アブナキ族が郷土の川で州のライセンスなしに魚を捕獲する権利を持っているとした1989年の下級裁判所の判決を否決した。この最高裁の判決をSovereign Abenaki Nation of Mississquoiとその支援者達は直ちに非難し、抗議声明を出した。その声明の中で、アブナキ族は次のように述べている。「アブナキの民はその土地を放棄しなかったし、ヴァーモント州政府の下で暮らすことを選ばなかつた。ヴァーモント州政府は、今においてもなおアブナキ族の抵抗を押しつぶそうとしている。」現在アブナキ族は、支援者達がヴァーモント州の最高裁、知事、アメリカ先住民問題に関する知事の諮問委員会 (Governor's Advisory Commission on Native American Affairs) に抗議文を送ることを求めている。またアブナキ族の先住民としての固有の権利を守るために防衛基金 (defense fund) が設立されている。The Eagle: New England's American Indian Journal 10, No.4 (1992), 1,17.

3. Dean R. Snow, "Eastern Abenaki," *Northeast, Handbook of North American Indians* 15, ed. Bruce G. Trigger (Washington, D.C.: Smithsonian Institution, 1978), 137.

ものというよりはむしろ言語上の区分とされている。<sup>4</sup> 東アブナキのバンドは、メインの河川の流域を中心に生活を営んでおり、河川と河川との間の高地がお互いのバンドの境界となった。ディーン・スノウは、東アブナキを河川を中心にして大きく4つに区分している。スノウによると、東アブナキは、ペノブスコット川流域を中心とするペノブスコット・アブナキ、ケネベック川流域を中心とするケネベック・アブナキ、アンドラスコギン川流域を中心とするアロサガンタクック・アブナキ、サコ川流域を中心とするピグワケット・アブナキに分けられた。<sup>5</sup> 一方西アブナキのバンドは、ニューハンプシャーとヴァーモントに居住しており、コネティカット川上流のソーコーキ、メリマック川上流のウェニピソーキー、シャンプラン湖周辺のミシスクォイといったグループが西アブナキに含まれた。<sup>6</sup>

アブナキ族の生活においては、家族がその中心に置かれていた。家族のまとまりは重要で、お互いの結びつきは緊密であった。家族は食物、楽しい一時、苦難を共有した。アブナキ族の子供達は、両親、祖父母、おじ、おば、兄弟、姉妹に囲まれて成長をした。子供達は年長者を大変敬い、年長者も子供達に親切であった。子供達は冬の炉辺で、大人達から様々な物語を聞き、その中から生きるための知恵を学び取っていった。アブナキ族の社会は、寛容であること、歓待すること、共有することを非常に重要視したと考えられている。<sup>7</sup>

アブナキ族の間において、ローカルリーダーはサガモア (sagamore) と呼ばれていた。サガモアは、一般に、大きな親族の長であった。しかしながら大きな親族の長であることは、サガモアとなる機会を与えたにすぎなかった。サガモアとなるには、一般の人より優れた能力を持

4. Calloway, *Dawnland Encounters*, p.5.

5. Snow, pp.137-38. なおキャラウェイは、ピグワケット・アブナキを西アブナキに入れている。

6. Gordon M. Day, "Western Abenaki," *Northeast, Handbook of North American Indians* 15, 148-49.

7. Colin G. Calloway, *The Abenaki* (New York: Chelsea House Publishers, 1989), pp.27-28.

っていることを人々に示し、そうした能力が部族民によって認められる必要があった。それ故サガモアの権威は、獵師としての技量、戦士としての勇敢さ、演説家としての能力、さらには正直で寛大で知恵があるといったその人物の評判に由来していた。イエズス会のピエール・ビアールは、サガモアの権威が極めて不安定で、その権威への服従が強制的なものではなかったことを指摘している。<sup>8</sup> このようにサガモアの権威は限定的なものであって、サガモアが間違った行動をしたり、バンドがサガモアの指導の下で不幸な体験をしたような場合には、サガモアをやめさせることができた。サガモアは、生涯、その地位を維持するのが普通ではあったが、アブナキ族は、強力な指導者というよりは慣習あるいは大衆の意見によって統治されていた。サガモアの主要な仕事の一つは、バンドのメンバー間の不和を解決することであり、サガモアはこれを交渉によって行った。またサガモアは、慣習により、複数の妻を持つことができた。<sup>9</sup> サガモアが時としてシャーマンを兼ねる場合もあった。シャーマンは特別なパワーを持っており、コミュニティに絶大な影響を及ぼした。シャーマンは普通の人々よりも靈の世界に近い所にいると信じられており、人間以外の存在からの援助を得ることができた。シャーマンはまた、薬効のある植物についての特別な知識も持っていた。17世紀初期の東アブナキの最も著名な指導者であるバシャベス (Bashabes) は、サガモアであると同時にシャーマンであったと考えられている。バシャベスという名前は、サミュエル・ド・シャンプランをはじめとする当時の探検者達の記録によく記されている。バシャベスは

8. Alvin Morrison, "Dawnland Decisions: Seventeenth-Century Wabanaki Leaders and Their Response to the Differential Contact Stimuli in the Overlap Area of New France and New England" (Ph. D. dissertation, State University of New York at Buffalo, 1974), 40.

9. Ibid., p.39. なおビアールは、実際には多くのサガモアが一人の妻しか持っていないことをも記している。複数の妻を持つ理由としては、子供を多く持つことにより家族を増やすこと及び接待と奉仕があげられている。

東アブナキのサガモア達の中の第一人者であって、すべての東アブナキの指導者として認められていた。それ故17世紀の初期においては、東アブナキはバシャベスの下で連合を結んでいたということができるであろう。<sup>10</sup>

アブナキ族の社会は性によってその仕事の区分がなされ、男性、女性のそれぞれが異なった義務と責任を持っていた。男性は木を切り倒してロングハウスの枠組みを建てたり、カヌーを作ったり、狩猟や戦いに従事した。女性の仕事には、畑の作物の世話をすること、調理をすること、獸皮をなめすこと、衣服やカゴを作ること、装飾を施すことが含まれた。アブナキ族の子供達は、早い時期から、アブナキ族の社会が彼らに要求する技術を学んだ。男の子は、歩くことができるようになるとすぐに弓矢の練習を始めた。少年達は父親やおじの狩猟や漁撈に同行し、獲物を取るための様々な技術を学んだ。若者になると守護霊（guardian spirit）を見つける必要があった。若者はまず絶食し、自らを浄めてから一人で遠くに出かけた。そしてそこで幻または夢の中で守護霊が現れてくるのを待った。守護霊はよく鷲、熊、亀の形をとった。若者はこの時に、守護霊が特別な力で彼を助けてくれるであろうことを知った。このようにしてアブナキ族の若者は、14才から15才までには、社会の中で一人前の大人としての務めを果たす準備ができていた。一方少女達は大人の女性の仕事に同行し、その技術を学んだ。女性達の仕事の多くは、メープルシロップを集めることや、畑の植え付けをし、収穫の取り入れを行うことのように共同でなされた。アブナキ族の少女の人生において、月経の始まりには重大な意味があった。それは少女から大人の女性になったことを意味した。月経のある女性は、バンドとは別の場所にあるウィグワムで過ごした。月経の期間、女性達は調理することも男達と接触することもできなかった。

アブナキ族の社会において、結婚は異なった家族同士を結びつけ、お互いの絆を強化した。結婚後、新しい婿は、普通、妻の家族と一緒に

10. Snow, 137.

生活をした。<sup>11</sup>アブナキ族の死者は、その人の持っている最も立派な服を着せられて、身体を樺の木の樹皮で作られた筒でくるまれた。そして死者が大切にしていた所持品と共に埋葬がなされた。葬式の時には、葬送歌が歌われた。未亡人は悲しみのしるしとして頭巾をつけて、一年間喪に服した。男やもめの場合は、顔を黒く塗った。

次にアブナキ族の生活の営み方を見ていきたい。アブナキ族の生活は、主として狩猟・漁撈・採集の一年毎の周期的な繰り返しに基づいて行われていた。即ち春には、アブナキ族は、産卵のために川を遡ってくるチョウザメ、鮭、シャド(shad)、キュウリウオ(smelt)などの魚を取った。春は漁業と密接に関係があるので、ペノブスコット・アブナキ族は、4月を「やすで魚を取る月」(spear-fish moon)あるいは「キュウリウオの月」(month of smelts)と呼んだ。<sup>12</sup>またこの時期には、多くの東アブナキのインディアン達が海岸へと出かけて、魚や貝を取ったり、海にいる哺乳類を捕獲したりした。アブナキ族は魚を取るためにやす、網、釣り針、やなといった道具を用いた。夜には、獲物をひきつけるためにたいまつに火をともすこともあった。<sup>13</sup>ロブスターや蟹は浅瀬でカヌーからやすで突かれた。漁撈は春に限られていた訳ではなかった。夏の間も東アブナキは海に行き、魚や貝を取ったりした。このようにして手に入れた魚の幾らかを、アブナキ族はスモークにし、乾燥させて保存した。

狩猟・漁撈・採集がアブナキ族の生活の中心ではあったが、シャンプラン湖とコネティカット川周辺に住むアブナキ族は、トウモロコシ、ソラ豆、カボチャ(squash)を栽培した。<sup>14</sup>これらの農作物は夏の終わりか秋の初めに収穫された。さらに女性達は、春と秋に様々な液果や堅果を集めた。クランベリー、ブルーベリー、黒苺、サクランボ、落花生、クルミ、ドングリ、

11. 西アブナキの花嫁は、夫の家族と共に行動することもあった。

12. Calloway, *The Abenaki*, p.17.

13. チョウザメは、夜、たいまつの明かりで水面に引きよせられた。

西洋ブナの実などが集められた。

秋になると、アブナキ族のバンドは細かく家族に分かれて、散らばっていった。<sup>15</sup> 各々の家族の男性達は、鹿、ムース、カリブー、ビーバー、熊、ジャコウネズミの狩猟に従事した。女性達は獸皮から衣服を作った。また水鳥や旅行鳩の狩りも行われた。<sup>16</sup> 冬の間も狩猟は行われた。猟師はかんじきをはいて、獲物に忍びよった。狩猟を行うにあたって、アブナキ族は、自分達が必要とするだけの獲物しか殺さなかった。アブナキ族は獲物に敬意を払い、動物の靈を怒らせないようにする為の儀式をとりおこなった。鹿や熊を殺した狩猟者は、その動物の靈に謝罪し、肉を一切れも無駄にはしなかった。狩猟・漁撈・採集に基づいた生活を維持していくために、アブナキ族は他の生物の習慣や生態系についてよく理解していた。動植物は自然のサイクルに従って暮らしていたのであるが、アブナキ族も移動を行い、自然のサイクルに従うことによって、ニューイングランドにおける季節毎の多様な自然の恵みを十分に利用することができたといえるであろう。

アブナキ族の住居には二つのタイプがあった。一つはウイグワムで、円錐形をしており、樺の樹皮や獸皮で作られていた。ウイグワムは、家

族が移動を行うときには、容易に解体することができた。もう一つのタイプはロングハウスで、アブナキ族が集まる村に建てられた。男性達が若木を地面に突き立て、上部を内側に曲げて、丸屋根またはアーチ状にすることで、ロングハウスの枠組みを作った。その後女性達が樹皮で枠組みを覆い、縫いつけた。今まで述べてきたように、アブナキ族は天然資源を効果的に利用するために移動を行っていた。それ故持ち運びの可能な住居は、アブナキ族の生活にとって欠くべからざるものであった。

アブナキ族は自然の力を説明するために豊かな物語を作り出した。例えは漁師が溺れそうになった時には、湖や川に住んでいるモンスターが、水の中に漁師を引き込もうとしたためであると信じた。また猟師は、山の頂にはめったに行こうとはしなかった。高い山に住む靈を怒らせることを恐れたからである。さらに東アブナキも西アブナキも、グルースカービー (Gluskabe) についての物語を持っていた。<sup>17</sup> グルースカービーは、タボールダック (Tabaldak) の手から落ちたちりで自らを創ったと考えられている。<sup>18</sup> タボールダックは、世界をアブナキ族にとて住みやすくする為の力をグルースカービーに与えた。ある物語は、グルースカービーが動植物の生命を救ったことについて述べている。それによると、蛙に似た生物が地球上の水をすべて飲んでしまったために、動植物は喉が渴いて死にかけていた。そこでグルースカービーは、その蛙に似た生物を殺し、水を解き放った。解き放たれた水は川となって流れた。その結果多くの動物が川に飛び込み、魚や水中で暮らす生物となった。また別の物語では、グルースカービーは山の頂にいる巨大な鳥をつかまえに出かけた。その鳥は鷺で、翼を動かすことによ

14. Calloway, *Dawnland Encounters*, p.6. ニューイングランド北部の海岸地方については、ケネベック川より南のインディアンは農作物の栽培に従事したが、それより北では、農作物の栽培の徵候は見られなかったことをウィリアム・クロノンは指摘している。William Cronon, *Changes in the Land: Indians, Colonists, and the Ecology of New England* (New York: Hill and Wang, 1983), pp.38-39. クロノンのこの指摘は、1524年のヴェラツァーノの航海の記録に基づいているのであるが、一方シャンプランは、北はサーコ川までしか農作物が栽培されているのを見なかった。シャンプランによれば、ケネベック川河口の住民は、敵対している部族によって作物を奪われるので、植え付けをしなくなつた。

H. P. Biggar, ed., *The Works of Samuel de Champlain*, 6 vols. (Toronto: Champlain Society, 1922-36), 1: 321.

15. 家族に分かれていたのは、大体10月から3月頃までと考えられている。

16. 鳥の移動は、4月、5月、9月、10月にインディアンの食物供給に大きな貢献をした。

17. グルースカービーを中心とする様々なアブナキ族の物語を集めたものとして、Joseph Bruchac, *The Faithful Hunter Abenaki Stories* (New York: Greenfield Review Press, 1988)がある。なおキャラウェイは、Gluskabeと表記しないで、GluskabまたはGlooskapと表記している。Calloway, *Dawnland Encounters*, p.7.

18. Bruchac, p.9; Calloway, *The Abenaki*, p.23.

よって強い風を送っていた。グルースカービーはその鷺をつかまえて、翼を縛った。すると風はやんだが、空気が非常に熱く、重苦しくなり、グルースカービーは息をすることが困難になった。そこでグルースカービーは、人と動物を涼しくするのに十分な風を鷺が送ることができるよう、鷺を止まり木に戻し、翼を自由にした。このようなグルースカービーをはじめとするアブナキ族の物語は、アブナキ族とその周囲の世界との調和的関係を強めるのに役立った。彼らは自然のバランスを尊重し、動物との共生的関係を維持した。しかしながらヨーロッパ人が北アメリカに到着してから、こうした周囲の世界との調和的関係は崩壊したと考えられる。ヨーロッパからの新参者達は、グルースカービーが教える教訓を学ぼうとはしなかった。その結果、アブナキ族が非常に長い間維持してきた人間と自然とのバランスは崩壊し、グルースカービーは腹を立てて去っていった。このためアブナキ族はグルースカービーからの保護を得ることができなくなっと多くのアブナキ族は信じた。<sup>19</sup>

## II

1524年にヴェラツァーノは、フランス国王フランソワ1世の為に航海を行い、メインの海岸でアブナキ族と遭遇した。ヴェラツァーノは、この時に、アブナキ族がすでにヨーロッパ人と取引をしており、極めて警戒心が強いことを見いだした。アブナキ族はヴェラツァーノの部下を軽蔑し、岩からロープを使ってヨーロッパ人のボートの上に商品を降ろした。そして「陸に近づかないようにと呼び続けた。」<sup>20</sup> ヴェラツァーノが部下と共に上陸しようとすると、矢を放ってきた。

ヴェラツァーノ以後、ニューイングランド北部を訪れたヨーロッパ人を擧げると、1525年にはポルトガル人エステヴァン・ゴメス (Estevan Gomez) がペノブスコット湾を探検している。

19. Calloway, *The Abenaki*, p.25; *Dawnland Encounters*, p.7.

20. Calloway, *Dawnland Encounters*, p.32.

さらに1580年には、ポルトガル人シモン・フェルディナンド (Simon Ferdinando) が、イギリスのハンフリー・ギルバートの為に航海を行い、メインを訪れている。同じ年に、ジョン・ウォーカーがペノブスコット湾で、300枚の獣皮を手に入れている。1583年には、フランス人のエティエンヌ・ベリンジャー (Etienne Bellenger) がメイン、ニューブランズウィック、ノヴァスコシアの海岸沿いに航海を行い、インディアンと毛皮交易を行った。17世紀に入ると、まず1602年にイギリス人のバーソロミュー・ゴズノールド (Bartholomew Gosnold) がメインの南部に到着し、海岸沿いに南下をしている。1603年には、マーティン・プリング (Martin Pring) も最初にメインの海岸に到着し、そこから南下している。<sup>21</sup>

1604年から1605年には、フランス人のサミュエル・ド・シャンプランがアブナキ族の村を訪れている。シャンプランは、今日のアメリカ合衆国とカナダとの国境に位置するサン・クロワ (St. Croix) に植民地を築いたが、飢えと寒さの為、約半数の植民者が死亡した。フランスの植民者は、最初の冬をサン・クロワで過ごした後、ノヴァスコシアのポール・ロワイヤルへと移動をした。しかしながらこのシャンプランが、その後約1世紀半続アブナキ族とフランス人との友好的な関係を開始したとの指摘もなされている。<sup>22</sup> シャンプランは、1604年にアブナキ族の指導者バシャバスと会見し、その時の状況を次のように述べている。<sup>23</sup>

シュール・ド・モン (Sieur de Monts) が彼らと会い、彼らの国土を見るために彼らのもとへ私を派遣したこと、シュール・ド・モンは彼らの友人であり続け、彼らと彼らの敵であるスリクワ族 (Souriquois) とカ

21. 17世紀初期のイギリス人のニューイングランドへの遠征について詳しくは拙稿「1600年代のイギリス人のニューイングランドへの遠征」『京都外国语大学研究論叢』第39号(1992年), pp.1-16.

22. Calloway, *Dawnland Encounters*, p.34.

23. Biggar, ed., *The Works of Samuel de Champlain*, 1: 295-96.

ナディアン (Canadian) とを和解させたいと願っていることを、バシャベスとカバイス (Cabahis) とその仲間達に理解させるように、私は通訳に命じた。<sup>24</sup> さらに彼らの国土に移住して、彼らが現在行っているような惨めな生活を彼らがもはや送らなくてよいように、土地の耕し方を彼らに教えたいと彼が願っていることや、このような事柄についてのいくつかの他の考えを彼らに伝えるように、私は通訳に命じた。我々の通訳のインディアンは、彼らにこうしたことを理解させた。我々のこのような提起に対して、彼らは十分満足していることを示し、我々と友好的な関係を持つこと以上の大きな利益は、彼らにとって有り得ないと断言した。そして彼らは、我々が彼らの土地に移住することを望んでいること、彼らが将来今まで以上のビーバーを狩り、そのビーバーを彼らが必要とする我々の商品と交換することができるように、彼らの敵とは和睦を結び、平和に暮らしたいと考えていることを告げた。彼がスピーチを終えた時、私は彼らに手斧、ロザリオ、帽子、ナイフ及び小さな装飾品をプレゼントとして与えた。

一方イギリス人のジョージ・ウェイマス (George Waymouth) は1605年にアブナキ族の土地を訪れ、メインの海岸におけるアブナキ族とイギリス人との最初の出会いの記録を残した。イギリス人は、この時に、バシャベスからの招きを拒むことで大きな外交上の機会を失っただけでなく、5人のアブナキ族を誘拐し、捕虜として彼らをイギリスに連れて帰った。この5人の中にはサガモアのタハネド (Tahanedo) が含まれていたのだが、イギリス人は彼らを、ガイド、通訳、さらにはスパイとして役立てようとしたと考えられている。<sup>25</sup> この不幸な事件は、アブナキ族をイギリス人から遠ざけることにな

24. シュール・ド・モンとは、ピエール・ド・グア (Pierre de Gua) を指す。スリクワ族とカナディアンとは、ミクマック族及びモンタナー族を指すものと推定される。カバイスもアブナキ族のサガモアの一人である。なおシャンプランの航海には、ミクマック族が通訳として同行していた。

った。捕虜となったアブナキ族は大西洋を横断し、イギリスを「発見」した。彼らがイギリスを訪れた最初のアブナキ族であった。

1606年にプリマス会社は2隻の船をペノブスコット湾へと送ったのだが、このうちの1隻にタハネドが乗せられており、タハネドは結局、無事に故郷に戻ることができた。<sup>26</sup> この一年後の1607年に、イギリス人はケネベック川の河口にサガダホク植民地を設立した。しかしながらタハネドは、アブナキ族にイギリス人についての警告を与えており、アブナキ族は侵入者に対して厳重に警戒した。イギリスの遠征隊と共にアメリカへ戻ったアブナキ族の捕虜の一人であるスキコワロス (Skicowaros) も、植民者と共にいることを拒み、アブナキ族の下へと帰った。サガダホク植民地におけるアブナキ族とイギリス人との関係は、冷たく非友好的なものであったと考えられる。イギリス側の指導者ジョージ・ポパム (George Popham) の死後、両者の関係はさらに悪化し、アブナキ族は植民者に対して攻撃も行った。結局サガダホク植民地は1608年には放棄されることとなった。

1606年にサーコ川の河口のシュアコエト (Chouacoet) において、この地方のインディアンの族長オルメシン (Olmechin) とミクマック族の族長メサムエト (Messamouet) は重要な会見を行った。<sup>27</sup> メサムエトは、1604年にシャンプランがメイン沿岸の探検を行ったときのガイドの一人であり、すでにフランスへ行った体験もあった。この時にメサムエトはオルメシンに対して、ミクマック族と交易をし、フランス製の様々な商品を手に入れるよう求めた。これに

25. Neal Salisbury, *Manitou and Providence: Indians, Europeans, and the Making of New England, 1500-1643* (New York: Oxford University Press, 1982), p.91. なお Tahanedo が Nahanada と表記されている場合もある。これらの5人のインディアンの居住地はペマキッド (Pemaquid) である。スノウの区分に従えば、彼らはケネベック・アブナキに属する。

26. 2隻の船のうち、1隻は途中でスペインの船団に捕らえられて、メインの海岸に到達できなかった。タハネドの乗った船はケネベック川を探索し、多くの情報をイギリスに持ち帰った。

対し、オルメシンは、武装してペイントをした男達の乗った15から16艘のボートをメサムエトに差し向けた。メサムエトはなおもオルメシンを説得しようと試み、スピーチをした後、オルメシンに持参した商品をすべて贈った。これらの商品は、「鍋、大中小の斧、ナイフ、ドレス、ケープ、赤いジャケット、エンドウ豆、ソラ豆、ビスケット」であった。<sup>28</sup>しかしながらオルメシンはメサムエトの要求を受け入れるスピーチをせず、トウモロコシ、タバコ、ソラ豆、スカッシュといった農作物を満たしたカヌーをメサムエトに贈ったが、メサムエトは満足しなかった。この点について、シャロップ船に乗っていたミクマック族の交易者は、時として食物を求めはしたが、彼らの主要な目的は毛皮を獲得することにあり、彼らはその毛皮をヨーロッパ人に売って利益をあげることを考えていたとの指摘がなされている。<sup>29</sup>いずれにせよ、シェアコエトにおいて、メサムエトの要求はオルメシンによって拒絶されたのであるが、1606年には、アイオウカニスコウ (ioucaniscou) によって率いられたミクマック族またはマリサイト族のグループが、ペノブスコットとケネベックにおいて襲撃を行い、アブナキ族を何人が殺している。このことの報復として、オルメシンとマルシン (Marchin) のバンドのメンバーが、ミクマック族に対して攻撃を行い、ミクマック族のサガモアの一人であるパノニアック (Panonicac) がバシャベスのテリトリーで殺された。ミクマック族のサガモアのメンバートウ (Membertou) は、婿が殺されたことにより、オルメシンとマ

27. シュアコエトのインディアンが属する部族については、研究者の間で一致していない。ケネス・モリソン (Kenneth Morrison) は西アブナキに含めているが、バート・サルウェン (Bert Salwen) はポータキット族に含めている。Kenneth Morrison, pp.33-35; Bert Salwen, "Indians of Southern New England and Long Island: Early Period," *Northeast, Handbook of North American Indians* 15, 169-70. オルメシンとメサムエトの会見については、フランス人のマルク・レスカルボが記録を残している。またオルメシンは、ケネベック川の族長マルシンの同盟者と考えられる。

28. Salisbury, pp.67-68.

29. Bourque and Whitehead, p.335.

ルシン及びバシャベスに従う民に対する報復を誓った。メンバートウは、1606年から1607年にかけての冬に、ミクマック族、マリサイト族、モンタネー族、さらにはケネベックのサガモアのサシノウ (Sasinou) を含む同盟を築いた。1607年にミクマック族の侵入者たちはシェアコエトでアブナキ族と戦った。フランス人のマルク・レスカルボ (Marc Lescarbot) は、このミクマック族とアブナキ族との戦いにおいて、ミクマック族とアブナキ族の各々のグループによって所有されていた武器を明らかにしている。アブナキ族はフランス製のナイフをいくつか持つてはいたけれども、彼らの主要な武器は、主に「弓、矢、つるはし、盾、木製のつちほこ」であったが、ミクマック族の武器は、「槍、短刀、短剣、斧、ナイフ、弓、矢、剣、つるはし、投げ矢」であった。<sup>30</sup>死傷者はアブナキ族の方が多かった。何故ならアブナキ族の矢の先端は骨でできており、致命的な傷を負わせはしなかったが、ミクマック族の矢の先端は鉄でできていたからである。このような武器を用いても戦いに勝つことが困難な時には、ミクマック族はフランス人が貸していたマスケット銃を用いた。アブナキ族とミクマック族とのこうした戦いは、ヨーロッパ製の武器がインディアン同士の戦いに大きな影響を及ぼしていたことのみならず、ヨーロッパ人がインディアン同士の関係の中に入り込んでいたことを示している。それにもかかわらず、こうした戦いは、肉親の死に対する報復というインディアンの伝統的なやり方でなされていた。

フランス人のジャン・ビアンクール・ド・プトリンクール (Jean Biencourt de Poutrincourt) は、1608年にアンジボー・ド・シャンドレ (Angibault de Champdore) 指揮下の遠征隊を、その地のインディアンと友好関係を築くためにシェアコエトへと派遣した。この遠征がなされた理由として、フランス人がミクマック族のメンバートウと特別な関係を結んでいることがアブナキ族を遠ざけ、このことにより北アメリカ

30. Salisbury, p.69.

北東部へのフランスの支配権が脅かされるとフランス人が考えたことが指摘されている。<sup>31</sup>オルメシ恩の後継者であるアスティコウ (Asticou) は、最初はフランスの意図に疑いを抱いていたが、パサマコディ族のサガモアのオージモン (Oagimont) が仲介役となり、長期にわたる交渉とフランス側の多くのプレゼントによって、シェアコエトのインディアンはフランスとの講和に同意した。ポール・ロワイアルを根拠地とするフランス人は、メンバートウとの戦いに敗れたアブナキ族のバンドの各々と交易上の関係を築き上げていったように見える。その後フランスのイエズス会のピエール・ビアールとエネモン・マッセは、1613年6月にメインのマウンテン・デザート島にサン・サヴール (St. Saveur) という名の植民地及び布教地を築いたが、数ヵ月後には、ジェームズタウンからサミュエル・アーガル指揮のイギリス船がやって来て攻撃を行い、これを破壊した。1614年にはジョン・スミスがペノブスコット湾を訪れた。スミスは、この時にペノブスコット湾の北からケープ・コッドまでを海岸沿いに航海し、その地域の天然資源や住民についての記録を残した。<sup>32</sup>スミスはこの航海において、フランス人がペマキッドを除くすべての港において交易に成功していることを見出している。<sup>33</sup>アブナキ族とミクマック族との戦いはその後も続き、バシャベスもこの戦いで亡くなった。<sup>34</sup>さらに1617年から19年にかけて、アブナキ族の間で伝染病が大流行し、多くのインディアンが命を落とした。このミクマック族との戦争及び伝染病の大流行が、アブナキ族の社会と生活に大きな打撃を与えたと考えられる。

## 終わりに

17世紀初めにアブナキ族の土地にやって来たヨーロッパ人は、アブナキ族の生活に変化をもたらし、彼らをますますヨーロッパ人との頻繁な接触へと引きずり込んでいった。それではアブナキ族の生活は、具体的に如何なる形でヨーロッパ人との接触によって影響を被ったのであろうか。本稿においては、この問題について十分な考察をすることはできないが、まずヨーロッパ人のもたらした伝染病をあげる必要がある。<sup>35</sup>1616年から19年にニューイングランドで猛威をふるった伝染病は、1617年にアブナキ族を襲い、メインの海岸沿いに広がっていった。この時にいくつかの地域では、75%以上の住民が犠牲になったとの推定もなされている。<sup>36</sup>1633年から34年にも天然痘がニューイングランドで大流行をしているし、1639年にも天然痘がアブナキ族を襲っている。こうした病気の流行は、アブナキ族の家族の中心的メンバーを失わせ、狩猟・漁撈・採集を基本とする伝統的な生活パターンを打ち碎いた。友人や肉親が次々と恐ろしい病気で死んでいくのを見た生存者は、心理的な傷を受けた。

次にヨーロッパ人との毛皮交易が、アブナキ族の生活に大きな影響を及ぼしたことを見ておく必要があろう。アブナキ族はヨーロッパ人の交易に従事することによって、武器・道具・装身具をますますヨーロッパ人に頼るようになっていった。ヨーロッパ製の金属は、アブナキ族の生活に大きな利益と向上をもたらした。新しい道具は今まで以上の農作物の生産を可能にし、優れた弓、かんじき、カヌーを作ることを可能にした。しかしながらヨーロッパ人との交

31. *Ibid.*, p.71.

32. *A Description of New England* (1616) を指す。

33. Salisbury, p.97. なおペマキッドでは、イギリス人のフランシス・ポパムがインディアンとの交易に成功していた。

34. この戦いはタランティン戦争 (Tarrantine War) と呼ばれ、1607年から15年まで続いた。バシャベスが亡くなったのは、1616年頃との推定がなされている。Snow, 141.

35. ニューイングランドにおける伝染病の大流行とインディアンの人口の激減について、詳しくは Sherburne F. Cook, "The Significance of Disease in the Extinction of the New England Indians," *Human Biology* 45 (1973), 485-508; Dean R. Snow and Kim M. Lanphear, "European Contact and Indian Depopulation in the Northeast: The Timing of the First Epidemics," *Ethnohistory* 35 (1988), 15-33.

36. Calloway, *The Abenaki*, p.45.

易に従事することにより、毛皮をめぐってアブナキ族と他の部族との戦いが拡大することになった。しかも他の部族との戦いは、ヨーロッパ人の侵入以前と比べて、大規模で徹底的なものとなった。即ちかつてのアブナキ族の戦いは規模も小さく、死傷者を出すことも少なかったが、銃が用いられるようになると、より多くの衝突を引き起こし、死傷者も多くなった。さらにヨーロッパ人との交易はアルコールをアブナキ族にもたらし、アルコールがアブナキ族の生活に悪影響をもたらした。酩酊はけんかや不和を引き起こし、調和に価値を置いていたアブナキ族のコミュニティに新しい緊張を作りだした。

最後に、ヨーロッパ人の宣教師がキリスト教をアブナキ族に布教したことを見ておく必要がある。とりわけイエズス会の宣教師は、アブナキ族の村に伝導所を建て、アブナキ族のシャーマンと精神上のリーダーシップを競いあった。アブナキ族のシャーマンが、伝染病からアブナキ族を守ることができないことが明らかになつた後で、キリスト教の宣教師はシャーマンの権威を害しようと試みた。宣教師はシャーマンの失敗を指摘するためにあらゆる機会を利用した。イエズス会の宣教師は、改宗者が古い信仰を完全に捨て去ることを望んだが、アブナキ族はキ

リスト教に改宗した場合でも伝統的な信仰を捨て去ったわけではなかった。しばしば彼らはキリスト教の外面的形態のみを受け入れたか、あるいは古い宗教に新しい教えをつなぎ合わせただけであった。それでもカトリックの教えは、アブナキ族の社会に極めて大きな影響を及ぼしてきた。一方イギリス人も、アブナキ族を改宗させるためにプロテスタントの牧師を派遣したが、イギリス人は残酷であり、裏切りを行うといった悪い評判のために、こうした試みはほとんど成功しなかった。<sup>38</sup>

アブナキ族は17世紀にヨーロッパからの侵入者たちと本格的に接触した。その結果彼らの伝統的な生活様式は破壊され、変化を強いられた。しかしながら彼らは、彼らの文化を新しい環境に適合させ、新しい要素を取り入れることで保持した。彼らのコミュニティは極めて適応力に富み、イギリス人にとっては恐るべき脅威であり続けた。アブナキ族は自分達の国土を侵略から守るために、1760年代までイギリス人と何度も戦い、ニューイングランドのフロンティアを悩ませ続けた。18世紀において、アブナキ族は勇猛な戦士でありかつ無慈悲な敵であるとの評判をイギリス人の間で得ることになったのである。

37. スノウ及びランピアは、17世紀の伝染病流行以前の東アブナキの人口を13,800人、西アブナキの人口を12,000人とし、伝染病流行後の17世紀半ばの東アブナキの人口を3,000人、西アブナキの人口を250人と推定している。Snow and Lanphear, p.24.

38. Calloway, *The Abenaki*, p.48.